

## 神経倫理学の歴史的展開

香川知晶 (山梨大学)

ここでは「神経倫理学(neuroethics)」という言葉の具体的な用例を幾つか取り上げて検討し、神経倫理学がどのようなものでありうるのかという問題を考えてみたい。

認知神経科学者のマイケル・ガザニガの著書、『脳のなかの倫理—脳倫理学序説—』(2006、紀伊國屋書店)は、おそらくこの分野の最初の邦訳書だろう。その中で、ガザニガは、ニューロエシックスという言葉は『ニューヨークタイムズ』紙のピューリッツァー賞受賞記者で、政治ジャーナリストのウィリアム・サファイアが作ったものだとしている。サファイアは、2003年のある記事の中で、ニューロエシックスを「人間の脳の治療や強化の正邪を論じる哲学の分野」と定義し、「われわれは今やニューロエシックスの世界へと歩を踏み入れたのだ」と宣言している。

サファイアは、その記事の前年の5月に、「ニューロエシックス、研究領域の確定」という会議を主催していた。それは、「150名を超える脳神経科学者、生命倫理学者、精神科医、心理学者、哲学者、法律や公共政策の専門家が参加した、画期的な会議」だったとされる。実際、この会議はニューロエシックスが広く認知される大きなきっかけとなった。米国では、この会議以降、関連する会合や出版物が徐々に目立つようになる。そして、2004年には、「大統領バイオエシックス評議会(The President's Council on Bioethics)」でも集中的な議論の対象として取り上げられるに至っている。これは、ニューロエシックスが公に認知されたことを意味するだろう。

サファイアは、2002年の会議の冒頭で行った基調報告の「《ニューロエシックス》という新分野の展望」では、ニューロエシックスを「医療と生物学的研究における結果の良し悪しについて考察するバイオエシックスのなかの独立した一部」と定義している。ニューロエシックスはバイオエシックスの下位区分というわけだが、その会議では「脳科学(Brain Science)と自己」、「脳科学と社会政策」、「倫理と脳科学の実践」、「脳科学と社会言説」、「ニューロエシックスの将来」という5つのセッションが組み立てられており、それらがニューロエシックスという新分野を構成する問題領域を指し示すものとなった。現時点での標準的なニューロエシックス解釈と思われるジュディ・イレスの説明 (Judy Illes, "Preface," in Judy Illes(ed.), 2006, *Neuroethics: Defining the Issues in Theory, Practice, and Policy*, Oxford UP, ix-xvi) も、この会議の枠組みを継承し、それを集約したものを見ることができる。

イレスによれば、ニューロエシックスは次の三つの部門からなる。第一は、「倫理の神経科学(neuroscience of ethics)」と呼ぶべき部門である。論じられるのは行為と責任、自由、人格性、自己、倫理的判断、さらには道徳の本質といった問題である。すなわち、

古くからある哲学的問題を脳科学の進歩とつぎ合わせることによって、心の哲学、道徳の哲学に対する脳科学の寄与を吟味すること、それがここでの課題となる。第二は、実践的ニューロエシックスと呼ばれる。それは、いわば「神経科学の倫理(ethics of neuroscience)」ともいうべき部門である。ここでは、脳科学研究実施に伴うさまざまな研究倫理的問題、医療応用実施の条件や技術利用に伴うリスクなどの問題、さらには技術や知見を治療を超えて使用することの可否など、研究や臨床の場面で現実化しつつある具体的問題への対応が検討課題である。最後に、神経科学と社会の関係が第三の領域となる。脳科学の進展は社会にどのような影響を及ぼすのか、またどのような形の社会との関係を築けば脳科学の進展は可能となるのか、科学と社会のインターフェイスがここでの問題である。

このように、ニューロエシックスなる言葉は雑多といえるほど実に広範な領域を含むものとして理解され、議論が開始されつつある。議論の背景には、神経科学の急速な発展があることはいうまでもない。アメリカのブッシュ大統領が「脳の10年」という予測を語ったのは、1990年である。その前後からの神経科学の発達は、実に目覚ましいものがある。イレズ(Judy Illes, 2003, “Neuroethics in a New Era of Neuroimaging,” *American Journal of Neuroradiology* 24(9): 1739)は、ニューロエシックスという言葉も、サファイアが発明したものではなく、初出はそうした神経科学が急速に発展し始めた1989年にまで遡ることができるとしている。ニューロエシックスが広範な領域にわたるといっても、そうした発展に即応してのことだろう。

しかし、「倫理の神経科学」と「神経科学の倫理」、さらには「神経科学の社会のインターフェイス設計」のすべてを、いずれも神経科学に関連するからといって、ひとつのニューロエシックスという言葉で包括するのは無理があるのではなかろうか。少なくとも、実質的な議論をもってこの領域に参画しようとするれば、どこにニューロエシックスという新しい言葉を用いるメリットがあるのか、それを見極める必要があると思われる。

その点で、ニューロエシックスという語(ただし、neuro-ethics という形だが)の初出論文の内容と議論が手がかかりとなるだろう。そのアネリーズ・ポンティウスの論文は、1973年に遡る(PONTIUS, AA, 1973, “Neuro-ethics of ‘walking’ in the newborn,” *Perceptual and Motor Skills* 37: 235-245)。論文は、ゼラゾたちが行った新生児に対する実験研究(ZELAZO, PR, et al., 1972, “‘Walking’ in the Newborn,” *Science* 176(21 April): 314-316)を批判するものだった。

報告では、ポンティウスのニューロエシックスが、イレズの分類でいけば、神経科学の倫理にあることを簡単に紹介し、そのことから逆に、新分野としてニューロエシックスの具体的な議論は倫理の神経科学、及び、神経科学と社会のインターフェイス設計に求めるのが生産的ではないか、という見通しを提示したい。